



中山修一著作集26 : 残思余考――すべては夢のなかから

中山, 修一

(Issue Date)

2024-12-02

(Resource Type)

book

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100493122>



中山修一著作集 26

残思余考——すべては夢のなかから

はじめに——著作集 26 の公開に際して

ここに公開する著作集 26『残思余考——すべては夢のなかから』は、いわば「中山修一著作集」（全二六巻）のまとめに相当する巻です。

これまで、そしてここまで、書き進めてきた自分を振り返り、いま見つめています。最終的に私の関心は、デザイン史、ウィリアム・モリス、富本憲吉、富本一枝、そして、火の国の人びとにありました。なぜ、私はこれらの事象や人物に興味をもったのでしょうか。裏を返せば、そのようなことに惹かれた自分とは、何者だったのでしょうか。さらに加えるならば、その執筆のなかに現われていた、よし悪しを判断する自分の内なる基準とは、一体何だったのでしょうか。そしてそれは、どこから来たものだったのでしょうか。それがいま、どこへ向かって旅立とうとしているのでしょうか。

一九世紀英国のウィリアム・モリスは、いよいよ晩年に入ると、中世の農民反乱を扱った「ジョン・ボールの夢」（歴史小説）を、現在の社会主義者の政治的行動を素材にした「希望の巡礼者たち」（物語詩）を、そして、革命後の人びとが生きる新世界を描写した「ユートピア便り」（夢想的物語）を著わしました。

私もモリスに倣い、書き手として内省を巡らせながら、最後のこの巻において、自身の過去、現在、未来の断片断片を思いつくがままに拾い出し、何かユートピアン・ロマンスのような夢の形式をもつ文として書き上げてみたいと思います。そして、「ウィリアム・モリス著作集」が本編二四巻と補遺としての二巻の計二六巻で構成されていたことに因み、この巻を最終巻として「中山修一著作集」（全二六巻）を閉じたいと思います。

最後に、この巻のタイトルに用いました「残思余考」という用語につきまして書き記します。著作集 1 から著作集 15 までは「中山修一著作集」の正編とするならば、著作集 16 以降の各巻は、その続編に相当します。つまりこれらの巻は、正編を受けての「残余の思考」という連続する流れに沿った副産物として成り立っているのです。こうした事情を背景として、「残余」と「思考」のふたつの単語が合成され、「残思余考」という独自の複合的造語が新たにここに誕生したのでした。この用語を第 22 巻から第 26 巻までの著作集最後の五つの巻に適用いたします。

二〇二五年九月二三日
南阿蘇の森の草庵で迎える彼岸の日に
中山修一

著者について

中山修一（なかやま・しゅういち）

1948年12月、熊本市に生まれる。熊本県立熊本高等学校時代は、新聞部にて部活を楽しむ。東京教育大学農学部林学科に入学、木材工学を専攻する。学生運動の影響でほとんど授業は行なわれず、ヨット部に所属し館山と葉山で年間一〇〇日以上合宿生活を送る。卒業に引き続き、東京教育大学大学院教育学研究科修士課程において美術学（工芸・工業デザイン）を専修する。その後、東京教育大学は移転し筑波大学となる。

1974年4月に神戸大学教育学部の助手に採用される。それ以降、講師、助教授、教授へ昇格。主としてプロダクト・デザインの実技とデザイン史の講義を担当する。組織としての教育学部は、職を得てしばらくしたのち発達科学部に改組され、さらに現在は、国際文化学部との統合により、国際人間科学部へと改称。

在職中、学内にあっては、神戸大学附属図書館副館長を務め、学外にあっては、大阪教育大学教育学部、長崎大学教育学部、国立高岡短期大学（現在の富山大学芸術文化学部）、および静岡文化芸術大学デザイン学部等で、非常勤講師として「デザイン史」の集中講義に長年従事する。また、海外においては、1995年に、ロンドンのウィリアム・モリス協会が本部を置く〈ケルムスコット・ハウス〉にて招待講演を行ない、さらに2010年には、上海の華東理工大学美術・デザイン・メディア学部に招かれて二日間の連続講演を行なう。

他方、1987-88年にブリティッシュ・カウンシル（British Council）のフェローとして、続いて1995-96年に文部省（現在の文部科学省）の長期在外研究員として渡英し、主として王立美術大学（Royal College of Art）とヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（Victoria and Albert Museum）を利用して英国デザイン史の歴史研究に当たる。

1987年から2013年まで英国のデザイン史学会（Design History Society）の会員。2003-14年、ブライトン大学客員教授（Visiting Professor at the University of Brighton）。また、2008年に学術雑誌 *The Journal of Modern Craft* (Berg Publishers, Oxford) が創刊されたおりには、国際諮問委員会（International Advisory Board）の委員を務める。

2013年3月に定年により神戸大学を退職し、それ以降、阿蘇山中の庵に蟄居し、執筆活動に専念する。専門はデザイン史学。

現在、神戸大学名誉教授、博士（学術）。英国にあっては、王立芸術協会（Royal Society of Arts）の終身会員（Life Fellow）、およびウィリアム・モリス協会（William Morris Society）の終身会員（Life Member）。

訳書（共訳を含む）に、ノエル・キャリントン『英国のインダストリアル・デザイン』（晶文社、1983年）、ハワード・ヒバード『ミケランジェロ』（法政大学出版局、1986年）、ステュアート・マクドナルド『美術教育の歴史と哲学』（玉川大学出版部、1990年、鹿島美術財団出版援助図書）、アヴリル・ブレイク編『デザイン論——ミッシェル・ブラックの世界』（法政大学出版局、1992年）、ジャン・マーシュ『ウィリアム・モリスの妻と娘』（晶文社、1993年）、およびポール・グリーンハルジュ編『デザインのモダニズム』（鹿島出版会、1997年）。

中山修一著作集 26

残思余考——すべては夢のなかから

おお、わが遥かなる彼岸よ

2025 年 10 月

中山修一著作集 26

残思余考——すべては夢のなかから

おお、わが遥かなる彼岸よ

目次	二
まえがき——まどろみのなかへ	三
第一部 ウィリアム・モリスの「レッド・ハウス」訪問	
一番目の夜 モリスの「赤い家」を訪ねる	五
二番目の夜 モリスに「黒い女」たる高群逸枝についてレクチャーする	六
三番目の夜 それでは聞くが、「黒い女」の夫はいかなる人物だったのか	八
四番目の夜 夫婦のあり方にかかわる日英の歴史的進化の比較研究は可能か	一一

凡例

- 一．本文中『 』は書名、雑誌名、新聞名を示し、「 」は論文や詩、記事等の表題を表わしている。また、強調すべき固有の事象についても「 」が用いられている。
- 一．本文中《 》は作品名を示し、〈 〉は建物の名称を表わしている。
- 一．本文中の【 】は図版の参照番号を指し示している。
- 一．引用文および引用語句内の〔 〕は本著作集の著者による補足である。

まえがき——まどろみのなかへ

南郷草介は、阿蘇の森のなかに隠棲して研究を続ける、どの組織にも属さない、いわゆる独立研究者です。彼の日々の暮らしは、生活することと勉強をすることで成り立っています。「生活すること」とは、町へ下りていって買い物をしたり、銀行や役場で用事をすませたり、家にあつては炊事や洗濯、掃除や庭いじりをするを意味します。一方の「勉強すること」とは、いうまでもなく、机に向かって資料に目を通したり、論文を執筆したりすることを意味し、ときおり、大きな町まで出かけては、図書館で調べ物をすることもあります。そこには、土日も休日も、正月や盆の休みもありませんし、旅行や外食のような娯楽も伴いません。このように草介の生活は、規則正しいといえば、まさしく機械のように狂いがなく、単調といえば、これまた機械のように極めて単調なのです。しかしながら、時計の針の刻みにも似た日常の正確な営みから一瞬はみ出すことも、ときにあるのです。それは、夜、夢のなかで見る非日常の世界を体験することでした。そこには、昼間の意識の領域とはまったく異なる、何に遭遇するかわからない、実に想像を超えた、未知なる世界が横たわっています。草介は、昼の生活と勉強だけでなく、夜の夢劇場に自分が立ち会うことにも、密かな楽しみを感じる人間でした。夢の内容は、そのほとんどが、昼間の勉強の延長上にある映像であり、物語であります。これまでに、執筆の出来事から刺激を受けて、遠くかなたの宇宙へと飛び立ったこともありましたが、執筆の登場人物と居残りをして、延々と話に興じたこともありましたが。

ある日、草介は、そうした夢のなかで起こった事象を書き止めようと考えました。といいましますのも、翌朝目が覚めれば、そのほとんどすべてが、何もなかったかのように雲散霧消するのが常だったからです。これから書くのは、草介の夢日記とでも呼べるものです。ここまで筆を進めると、彼は、少し安心したようです。眠気が襲ってきました。さあ、今夜は、どんな夢を見ることになるのでしょうか。期待を胸に、まぶたが重くなりました。「それでは、おやすみなさい」といったまま、草介は、まどろみのなかへと入ってゆきました。

(二〇二五年一〇月)

中山修一著作集 26

残思余考——すべては夢のなかから

おお、わが遥かなる彼岸よ

第一部

ウィリアム・モリスの「レッド・ハウス」訪問

一番目の夜 モリスの「赤い家」を訪ねる

これまで南郷草介が関心をもって研究してきたのは、詩人であってデザイナーで、そして政治活動家としても知られる一九世紀英国の著名人ウィリアム・モリスについてでした。モリスはまた、自身のデザイン会社である「モリス商会」を運営する経営者であり、さらには、古建築物保護協会を中心に活動する環境保護運動家でもありました。このように実に多彩な顔を持ち、世界中にその名が知れ渡った出色の人物こそ、モリスその人でした。

この夜、草介のまどろみのなかにあって映し出されたのは、ロンドン郊外のアプトンの地にそそり立つ「赤い家」と呼ばれるモリスの二階建ての邸宅でした。若いころ草介は、何度かこの「赤い家」を訪ねており、いわば彼にとっての曾遊の地でありました。この豪邸は、ジェイン・バーデンとの結婚に際してモリスが、友人で建築家のフィリップ・ウェブに依頼して設計させたもので、赤いレンガ造りであったために「赤い家」と呼ばれ、広い庭と幾つもの居室を備えていました。また、この家の壁や天井に施された装飾、あるいは置かれている家具やガラス器は、すべてモリスとその仲間たちの手によってデザインされ、建設当時この屋敷は、ゴシック様式の大聖堂になぞらえて「芸術の殿堂」として賞賛されました。

玄関を入ると、モリスが待っていました。「やあ、ソースケ」と、モリスが声をかけると、「久しぶり、トプシー」といいながら、ふたりは固いハグを交わしました。モリスは、その髪の毛が、まとまりのつかないウエイヴのかかった形状をしていたので、仲間内にあっては「トップ」とか「トプシー」とかの通り名で呼ばれており、それに倣って草介も、「トプシー」と呼ぶのが慣例となっていたのです。

「ソースケがここに来るのは、何年ぶりになる？」と、トプシーが尋ねると、草介は室内や天井を懐かしそうに見渡しながら、「ううん、五〇年以上前のようにもあり、昨日のことでもあるような……」と応じます。続けてトプシーは、「承知のように、この家は『赤い家』と呼ばれているんだけど、聞くとところによると、ソースケの国には『黒い女』がいるそうではないか。人の知るとおり、私も熱心な政治活動家で、ネッドの妻で、互いに信頼しあう数少ない女友だちだったジョージに宛てて出した手紙のなかで、自分のことを『半ばアナーキスト』と書いたこともあったんだが、アナーキストたちが使用する旗の色が『黒』なんだよなあ。その『黒い女』もアナーキストなのかい。「そう、その女も、正真正銘のアナーキストでした。それに、アナーキストを宣言する前は、トプシーと同じように、何と、詩人だったんだよ」。「へえー、それはなおさらおもしろいね。詩人でアナーキストか、親近感湧くねえ。どうだいソースケ、一度その『黒い女』について、私にレクチャーしてくれないか」。

(二〇二五年一〇月)

二番目の夜 モリスに「黒い女」たる高群逸枝についてレクチャーする

それから何日かが立ったある夜、南郷草介は再び「赤い家」でモリスと対面していました。モリスは、前に草介に依頼していた「黒い女」の話聞くのを楽しみにしていたようです。

「ソースケ、さっそくだけど、例の『黒い女』についてレクチャーしてくれないか」。「いいですよ、その『黒い女』は、本名を高群逸枝といいます。彼女が三六歳のときに出版した本が『黒い女』というタイトルの本で、それまでの自分が生きてきた道程を書き表わしたものなの。まあ、自叙伝的小説とでもいうのでしょうか。刊行は、ちょうど彼女が、無産婦人芸術連盟を設立し、主宰者となって『婦人戦線』を発刊しようとしている時期に重なります」。

「ほう、その高群女史だが、そのとき彼女は、私のことを知っていたらろうか」。「私もその点が気になって、少し調べてみたんですが、驚くべきことに、トプシー、あなたの *News from Nowhere* を読んでいたことがわかったんだよ」。「そうか、興味深いね。それで彼女は、私の本についてどう書いている?」。「*News from Nowhere* が出てくるのは、『黒い女』の四年前に出た『戀愛創生』という本のなかなんだ。どうやらこの本を書くに当たって、日本における直近の *News from Nowhere* の翻訳書である『無何有郷だより』を読んでいたらしく、逸枝は、『戀愛創生』のなかで、こういっているのです、いま、そのまま引用するよ」。

ウィリアム・モリスの「無何有郷だより」をみると、多くの子供達が、そこでは、自由な生活をして、森から丘へと遊び戯れてゐる。そこには学校といふものはない¹。

「このなかの『子供』を『女性たち』に、そして『学校』を『家庭』に置き換えて読み直してみると、こうなるのだが……」といいつつ、草介は、次のように表現してみせました。

多くの女性たちが、そこでは、自由な生活をして、森から丘へと遊び戯れてゐる。そこには家庭といふものはない。

続けて草介は、こう言葉を継ぎます。「トプシー、このとき逸枝が発見した、あなたの描くユートピアは、彼女自身の魂に宿す理想世界と完全に一致したのではないかなあ!と、私は思っているのです」。それを聞いて、トプシーは、「ううん……そうか」と大きく呼吸をして、うなずきました。

間違いなく、草介の目には、トプシーが逸枝に関心をもったことが見て取れました。そこで草介は彼にいいました。「逸枝はアナキストとして活躍したあと、日本で最初の女性史学の研究者として身を起し、『女性の歴史』(全四巻)を著わすのだが、夫の橋本憲三は、生前の逸枝の言葉として、このようなことを書き記しているのだよ。以下に引用してみるね」。

日記一卷と追加研究一卷とができ上ったら、「過去の紙くず」は一切焼いてしまって、また新しい出発をしましょう。あたたかいところに行って、そこで私は『女性の歴史』

で書けなかった未来像を叙事詩のかたちで描くでしょう。たぶん私の最後の詩篇となるでしょう²。

「トプシー、あなたはこの文をどう読む？ 私には、最晩年には、暖かいあの熊本の『火の国』に帰郷して、トプシーに倣って *News from Nowhere* を書きたいという、見果てぬ夢を語っているように、読めるんですが」。「なるほどね、それだったら、女性の過去と現在の姿に続く、解放のための闘争に立ち上がった女性たちのその後の未来社会を描くことになるんだね」。「私も、そういう思いが逸枝にあったように思います」。「ところで、高群女史は、ソースケと同じ、熊本『火の国』の生まれかい」。「はい、そうです」。「ソースケもそうだけど、彼女も情熱的だったのだろうねえ。それで、その本は世に出たのかい」。「いいえ、残念ながら、刊行されることなく、逸枝は世を去ってしまいました」。「そうだったのかあ。本当に残念だね。ぜひとも読んでみたかったなあ。しかし、詩人にしてアナーキスト、そして女性史学者、何と豊かな才能の持ち主なんだろう」。「本当にそうですね」。

「ソースケ、今日のレクチャーはとても感動的だったし、さらにどうしても知りたいことがいま私を襲ってきたよ。それは、詩人、アナーキスト、そして女性史学者の三つの活動を結び付ける、糸のようなものが存在するかどうかなんだけどねえ」。「そうそう、あなたについては、詩人、デザイナー、社会主義者を結ぶ糸を、世界の研究者がいま必死に探し求めています。トプシーと逸枝には何か共通するものがあるのかもしれないね」。「そうなんだよ、それが判明すれば、もはやイギリスも日本もないね。地域と時間の差こそあれ、まさしく人類史における発芽がこの時代に起きているんだよ」。「私もそう思います。そうなれば、日英の赤と黒のブルースといった感じですね」。「ソースケ、私が、‘How I became a Socialist’を書いたのは知っているよね、そこで尋ねるんだが、ソースケ、『いかにして私は詩人、アナーキスト、女性史学者になったか』を書いてみる気はないかね。とりわけ高群女史の性格とか精神世界が知りたいね」。「私にできるだろうか？」。「大丈夫だよ。ソースケ、私のモットーが、ヤン・ヴァン・エイクに倣った『私にできますならば』であることはよく知っているよね。私のこのモットーを、ソースケも使ってくれないか。期待して待っているから、今度会ったら読ませてくれたまえ」。

ここで目が覚めると、来る日も来る日も、草介は机に向かいました。こうしてできたのが、「高群逸枝のパーソナリティーの分析——親子関係、職業選択、気質、そして心的風景」でした。今度夢でトプシーに会ったら、ぜひ見せたいと、草介は思いました。

(二〇二五年一〇月)

注

(1) 高群逸枝『戀愛創生』萬生閣、1926年、253-254頁。

(2) 橋本憲三「三つの言葉 ＊後記にかえて」『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、理論社、1970年（第4刷）、483頁。

三番目の夜 それでは聞くが、「黒い女」の夫はいかなる人物だったのか

南郷草介の夢にモリスが登場したのは、「高群逸枝のパーソナリティーの研究——親子関係、職業選択、気質、そして心的風景」を摺筆して、数週間が立ったときでした。その間モリスは、この愚作に目を通していたようです。

「ソースケ、いい内容だったよ。自分の関心を満たしてくれて、ありがとう。ところで、高群女史は、明らかに女性解放主義者のように思えるのだが、日本におけるその運動は、いつころ、どのようにして生まれたの？」。

「一般には、雑誌『青鞥』の刊行をもって、日本の婦人運動ははじまったといわれています。創刊は一九一一年のことで、中心人物は、平塚らいてうという名の女性です」。

「へえー、きっかけは『青鞥』という名の雑誌なのか、それはおもしろそうだね」。

「そう、この名称は、あなたの国に姿を現わしたブルー・ストッキングズ協会（Blue Stockings Society）に因んでいるといわれています。この協会は、実際どんな団体だったの？ トプシー」。

「それは、エリザベス・モンタギューといった女性たちによってつくられた団体でね、女性教育の向上を求めて一八世紀中頃に設立されたんだよ。当時は、大学へ行き、学問を身につけることができたのは男性のみで、女性は裁縫や刺繍などの針仕事の世界に閉じ込められていたんだ。それに不満をもった女性たちが、社会論や教育論に関心をもつようになり、文学や芸術についても論じ出した。それにしても、イギリスのブルー・ストッキングズ（青い靴下）が、日本の『青鞥』とはね、ふたつの国に、何か深い因縁を感じるね」。

「トプシーと同じように、私もそう、両国のあいだには深い関係があるのを感じます。それでは、ブルー・ストッキングズの女たちの活動は、その後、どう引き継がれていったの？」。

モリスは、ここで一呼吸をすると、遠くを見つめるように、ゆっくりとソースケに語りはじめました。モリスの手の横には、『ヴィクトリア時代の女』¹と題された一冊の本がありました。

「イギリスのブルー・ストッキングズの活動はね、英国のフェミニズム運動の祖型とも呼ばれることもあるんだが、その後の動向は、だいたいこのようになるんじゃないかと思う」。

全般的に振り返れば、次の一九世紀、つまりヴィクトリア時代は、産業国家として、そして宗主国として『新しい英国（New Britain）』を生み出した。しかし、それだけではなく、女性の生き方にも、大きな変化をもたらした。早くも一八六〇年代に『時の女（Girl of the Period）』が登場し、九〇年代には、それに続く、『新しい女（New Woman）』が出現するんだ。

『時の女』と呼ばれた人たちは、一般に自立心が強く、開放的な精神の持ち主で、それは、髪の色や化粧、男言葉の使用など、ファッションや行動に表われた。市街地は、いまだ男性の支配地だったが、七〇年代に入るところには、こうした『時の女』たちが、食事や買い物、美術館訪問などを楽しむために、出没するようになった。八〇年代から九〇年代に入ると、『時の女』に批判的だった、時のジャーナリズムは、『新しい女』の現象に着目するようになる。彼女たちは、多くの点で『時の女』の特質を引き継ぎ、たばこを吸い、大胆にも男性との会話に加わり、町にも繰り出した。しかし、さらに進んだ独自の特質も兼ね備えていた。

『新しい女』にみられる強調すべき特徴は、全面的に夫の収入に頼り、『家のなかの天使』となって生きることに疑問を感じ、自ら職業をもち、政治に目覚め、自分の価値判断によって結婚を選択することだった。彼女たちのなかには、『時の女』に見受けられた、異性とのうわべの恋愛ごっこのようなものから離脱し、それにとって代わって、結婚を見下し、女らしさを軽蔑するようになった者もいた。『新しい女』の独立心は、仕事をもつことでさらに強化された。そのなかのある者は作家や芸術家として、別のある者は政治活動家として、自分の道を見出していったことは、よく知られる話だよ。

私の妻のジェインが、『時の女』の世代に、私の娘のメイが、『新しい女』の世代に属している。多かれ少なかれ、このふたりは、こうした時代の空気を感じ取っていたと思うね。

「なるほど、そうだったのですね、よくわかりました。日本においても、当時『青鞥』の女たちは、『新しい女』という名で呼称され、『新しがる女』という蔑称でもって呼ばれることもありました。『新しい女』の呼び名も、英国と日本で同じ、これもまた不思議ですよ。時期は、少し日本が遅れますが……。

ところでトプシー、いまあなたは、妻が『時の女』という、娘が『新しい女』という社会の風を受けて生きていた、といいましたが、それに対して、男であるあなたは、それをどう思い、どのように対応したのですか。差し支えなければ、聞かせてください。

「そうだねえ」といいながら、モリスは腕を組むと、おもむろに口を開きました。

「承知のようにこの国は、当時、ひとつの公共の建物に入るにしても、ふたつの出入口が存在していた。人種によって出入口は異なり、同時に、使用する言語もふたつあった。また、『have (持てる者)』と『not have (持たざる者)』のふたつの階級があった。同じように、男と女のあいだには、相容れない深い溝があり、一方が一方を支配する社会構造ができ上がっていた。私は、人種、言語、階級、男女に存在する、いわれなき不当な「差異」をなくしたいと思って、つまりは、人間の生存にかかわる対等や平等の創出を願って、そこに立ちふさがっている強固な差別意識や偏見を崩壊させるために、社会運動に身を投じたんだよ。そこから推し量れば、家族というひとつの社会集団にあって、私が妻に対して、そして、私が娘に対して、どう接していたかは、わかってもらえるのではないかと思う」。

草介は、現在の英国女性の伝記作家であるフィオナ・マッカーシーが書いた『ウィリアム・モリス——われわれの時代のための生涯』を読んでいました。そのなかでマッカーシーは、モリスは「フェミニストであったにちがいない」²と書いていました。草介は、トプシーから直接話を聞いて、なるほどトプシーも「フェミニストであったにちがいない」と、このとき確信したのでした。そして、草介はトプシーに、以下のような質問をしました。

「一般に『フェミニスト』とは、女性の解放を求める女性を指するという用語に思われがちですが、男性であるモリスを指してフェミニストという用例からすれば、もはやこの用語は、女性、男性にかかわらず、女性の解放を求めるすべての人たちをいうのでしょうか？」。

「そのとおりだよ。フェミニストは女性だけとは限らない。男性のフェミニストもいます。さらにいえば、『フェミニスト』とは、男性、女性、性的少数者を問わずいずれもの性が、いっさいの偏見も差別も受けることなく、その多様な生き方と諸権利において平等かつ対等でなければならないことを主張する人すべてを指します。これが、この国での『フェミニスト』の用語法です」。

それを聞いて草介は、わが意を得たように、思わずこう発話しました。

「であれば、高群逸枝の夫もフェミニストであったにちがいない」。

それを耳にしたモリスは、身を乗り出して、草介に問いました。

「ソースケ、いきなり、おもしろいことをいうね。それでは聞くが、『黒い女』の夫はいかなる人物だったのかい……何に目覚めてフェミニストになったのかい?」。この言葉を聞いたところで、草介の夢世界は消えてゆきました。

目が覚めると草介は、思わず大声で、こう叫んでいました。「現在の人間存在のあり方を見ると、残念ながら、支配者と被支配者、迫害者と難民、富者と貧者、多数者と少数者、そして強者と弱者のあいだに、さまざまな差別や偏見が不当にも存続する。この垣根に疑問をもち、それを破壊し、その先に平等の地平を見ようとする人間全員がフェミニストなのだ! あなたもそうだし、私もそうだ」。

こうしてモリスとの会話がきっかけとなって、イギリスにあってはモリスがそうであったように、高群逸枝の夫の橋本憲三こそが、日本における最初期のフェミニストのひとりだったにちがいないという命題が、草介の頭から離れなくなっていました。それと同時に、その命題を、憲三本人の語りによって実証してみてはどうかという天の声に似たささやきが、草介の耳にしきりと届くようになりました。草介は考えました。これまでも憲三とはしばしば夢のなかで会話を楽しんでいました。それならば、これから憲三が夢のなかに遊びに来るたびに、憲三自身に本人が体験した生涯を語ってもらい、それを自分が傍らにしながら筆記することによって、憲三の伝記が書けるかもしれない——。そうした考えに達するや、草介の胸には、完成したらまた、モリスに読んでもらおうという熱い思いが溢れ出ていました。かくして草介は意を決し、「橋本憲三の生涯——ひとりの『フェミニスト男子』の誕生経緯」の執筆に向かったのです。

(二〇二五年一〇月)

注

(1) Suzanne Fagence Cooper, *The Victorian Woman*, V&A Publications, London, 2001.

(2) Fiona MacCarthy, *William Morris: A Life for Our Time*, Faber and Faber, London, 1994, p. vii.

四番目の夜 夫婦のあり方にかかわる日英の歴史的進化の比較研究は可能か

「高群逸枝のパーソナリティーの研究——親子関係、職業選択、気質、そして心的風景」に続いて「橋本憲三の生涯——ひとりの『フェミニスト男子』の誕生経緯」を書き終えた南郷草介は、少し疲れが出たのか、いつのまにか深い眠りに入ってしまった。それでも草介は、そのまどろみのなかにあって、トプシーの住む英国と自分の母国である日本にとって何か共通する、男女のかかわり方に関する不思議な歴史的進化の側面に思いを馳せていたのです。

教科書に書かれてあるように、英国における産業革命は、一八世紀半ばころからはじまり、一九世紀の三〇年代ころまでに完成します。「革命」といっても、一瞬のうちに成し遂げられたのではなく、長い歳月をかけて進行し、その担い手は、主として技術者や発明家といった民間の人たちでした。ウィリアム・モリスが生まれた一八三四年は、ちょうど産業革命の終了期にあたります。

産業革命の本質部分は、いうまでもなく、機械による大量生産です。そのことは、手の労働を衰退させ、農村共同体を崩壊させ、都市化の進展を促しました。また、それによる資本主義の発展により、資本家層と労働者層のふたつの階層が形成されてゆきました。さらには、人の移動が促進されたり、環境が汚染されたりもしました。そうした全般的な社会変動は、ある人びとにとっては利益につながるものでありましたが、別の人たちにとりましては、耐えがたい過酷な生き方を強いる元凶になりました。この状況下から、社会主義は誕生します。

一方、日本の産業革命は、英国から大きく遅れて、日清・日露のふたつの戦争から第一次世界大戦へと向かう時期に展開され、国家主導のもと極めて短期間のうちに成し遂げられました。高群逸枝の最初期の詩集である『日月の上に』と『放浪者の詩』が刊行されるのが一九二一（大正一〇）年で、日本における産業革命後の新たな社会と文化の出現時期と重なります。

続く昭和期にあって、逸枝は、これまでの詩人、そしてアナーキストという立場から越境して、女性史学を対象とする研究者の道へと転じます。逸枝はなぜここへ来て、詩人やアナーキストとしての活動からさらに一步前に踏み出し、男性社会においてそれまで見向きもされなかった、いかにしてこれまで女性たちは生きてきたのかという歴史的テーマにかかわって、学問として秩序立てて記述しようとする、黎明期の学術世界へと身を投じたのでしょうか。幼少期から内在する本人の熱い思いがあったことはいうまでもありませんが、夫である橋本憲三の強い勧めによるものであったこともまた間違いありません。明らかに、旧来の夫婦のあり方に変化が生じているのです。しかしながら草介には、この変化にあっては、逸枝と憲三の一組の夫婦に帰される特殊固有の理由だけからでは説明がつかない、兩人さえも気づいていなかったかもしれない、もっと大きな世界史的な、あるいは文明史的な背景が潜んでいるように感じられるのでした。

実際、すでにそれと部分的に類似した行動をとっていた、先例となる夫婦が一九世紀の英国に存在しました。ウィリアム・モリスとその妻のジェイン・モリスのカップルです。英国の産業革命後の新しい社会、文化、政治の状況下において、詩人、そしてデザイナーから出発して革命的社会主義の道を歩み、ユートピアン・ロマンスの作家として、「ジョン・ボー

ルの夢」において「過去」の、「希望の巡礼者たち」において「現在」の、さらに加えて「ユートピア便り」において「未来」の、かかる時空の人びとがどう生きていたか、あるいは、どう生きようとしているのか、社会主義世界の歴史的諸相の一端を現前化させたのがモリスでした。一方、その妻のジェインは、モリスの親友で画家のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティのモデルとなって、その職業を誇りに思い、そして同時に、根気を要する刺繍に自らの天分を見出して生きてゆきました。

モリスとジェイン、逸枝と憲三、このそれぞれの夫婦のあり方をつぶさに比較考量するならば、英国と日本の地域差、一九世紀と二〇世紀の時間差を超えて、男女関係にかかわる歴史的な進化の過程のなかで発生した、ある種共通する事例の存在を発見することができるのではないかと、いま草介は直感するのでした。

男か女かどちらかの、個別の研究や伝記は過去にありました。その限界を超えて、いまや遅ればせながら、男は女にどう接したのか、女は男をどう見たのか、男女の、あるいは夫婦の関係にかかわる研究や伝記がやっと胎動してきているのです。しかしながら、その一方で、日本と他国の夫婦や男女にみられる行動の内実と差異とを対象とした比較研究は、草介の知る限り、いまだ見出せません。

「新しい女」はどこから生まれたのか。「フェミニスト男子」はいかにして誕生したのか。そのカップルは、どのような夫婦関係を、あるいは、いかなる男女関係を築いて生きていったのか。それを主題にした日英の近代の夫婦の比較研究が、自身の次の研究のステップになりはしないかと、ベッドのなかにあって草介は、見果てぬ夢と関心とを相手に、しきりと格闘していたのでした。夫婦の文明史、あるいは男女関係の人類史、そうした学術の地平は、果たして存在するのだろうか。その可能性に思いが到達したところで、東の空が白み始めました。

(二〇二六年三月)